



平城京右京九条一坊、現郡山市観音寺町には奈良時代に古代寺院が建っていた。観世音寺である。

続日本紀には、観世音寺は国家の比護を受けた寺であったと記されており、この寺には貴重な経巻類が多数保管され、仏法を学ぶ学僧たちがそれを借出して学んでいたと伝えられる。そのことを伝える説話が今昔物語に残されている。

『ときに神叡という学問僧がいた。ある時、虚空蔵菩薩に「我に智恵を得さしめたまえ」と願ったところ、数日して夢に菩薩が現れ「添下の郡の観世音寺の塔の心柱の中に、大乘法苑林章という7巻の書がある」と教えられた。夢から覚めた神叡が塔の心柱を覗くと確かに書が保管されており、この書で学んだ神叡は、深い知恵のある人となった』

神叡は法相宗を修めた元興寺の實在の僧で、奈良時代に名を残す名僧である。

この説話は、観世音寺が法相宗の經典を蔵する古代寺院で、大安寺や元興寺のように仏教教学の拠点的な寺であったと伝えている。説話から観世音寺には塔があって、天平の頃に實在したことは間違いないが、残念ながら何時ごろから存在したかは判然としない。

現在の観音寺町には小堂ながら観音堂が残されており、その南側にセーロン池と呼ばれるため池がある。この池からは奈良時代の古瓦が発見されていたが、近年その中に長屋王邸と同範瓦が見つかった。それは710年代に制作された平城京第1期の瓦である。観世音寺は奈良時代の早い時期、少なくとも720年ぐらいまでには平城京九条の地に建っていたと考えられるのである。

「扶桑略記」によると観世音寺を建立したのは、遣唐留学僧の智通といわれる。智通は飛鳥時代の遣唐僧である。彼が新羅船で唐に渡ったのは658年、そして大慈恩寺で玄奘三蔵に法相教学を学んで帰国した。帰国した年は明らかではないが、天武2年の673年には僧正となっており、明日香の仏教界、特に法相教学の主導的な位置にあったと考えて間違えないだろう。

平城京の観世音寺は、智通が唐から持帰った貴重な仏典とそれを写経した典籍を保管するための寺として建立されたと考えられないだろうか。

彼が唐に居た時、彼の師の玄奘が天竺、西域の旅から持ち帰った仏典の翻訳事業を進めていた時で、玄奘は貴重な仏典を後世に伝えるための寺院の建立も同時に進めていた。おそらく玄奘の事業に参画した智通は、同じことを平城の地で行なおうとしたのではないだろうか。

観世音寺は、智通から玄奘三蔵へ、そして遙かな天竺の地へ続く祈りを、後世に伝えるために建設された寺であったと考えられないだろうか。

観世音寺が建立された時、智通が在世であったかどうかは分からないが、史書が伝えるように彼の発願で建設されたことは間違いない。そして彼の願い通り観世音寺に残された仏典は、その後に花開く奈良の仏教教学に大きな影響を与え、奈良時代の文化に大きな貢献をしたことは十分考えられるだろう。

(幻の観世音寺 郡山観音寺町)